

■■ 門はやしと「みたま」祭り ■■

門はやし

三河の北設楽郡内でも、豊根村大字三沢は著しく古風の遺っている村で、第一村の旧家がそれぞれ以前のままだに存続していることが珍しかった。正月一日の門飾りすなわち一般にいう門松飾りをかどはや門囃しと言っている。この朝村の鍵取り榊原銀太郎の家では未明に起きて、稗二升を入れた袋を用意する。一方榊原家の屋敷下の「さんじゃく」という家の主人は、これも未明に起きて身支度を調べ榊原家に出向く。そこで榊原家から村の氏神の門はやしをなすべく命ぜられる、同時に前の稗袋を受け取って出かける。「さんじゃく」は村の二の旦那と称する家、すなわち熊谷喜曾二郎宅に行つてその稗を納め、これより氏神の門はやしに参る由を述べる。二の旦那は稗袋を受けると、それと同道してかねて用意した松杭等をともども持って氏神の社殿に行き、門はやしをする。「さんじゃく」はそれが了ると、その足で村の一の旦那すなわち夏目若平氏方へ行つて、無事氏神の門はやしのすんだ旨を報告する。一の旦那、二の旦那の家では、それよりわが家の門はやしをするが、「さんじゃく」はすぐに鍵取りの家に帰つて来て、屋敷裏の竜王を祀る社の門はやしをなし、次に鍵取りの家の門はやしをする。鍵取りの家の門はやしが終ると、それを見た峪向かいの辻紋平方で初めて門はやしをする。他の二四戸の家々もそれにならつて「はやす」のである。一の旦那、二の旦那付近の家も、ことごとく旦那の家にあやうのである。

はちじょうならし



「門はやし」をする一方、村の幣取り林順平氏の家では、主人が未明に起きて屋敷の後ろにあるいつの飯綱八天狗を祀つた山に登り、そこにある榊から一枝を折取つて、まず氏神の社に行き、「さんじゃく」がはやし終つた門飾りに注縄を張り渡し、それに図のように白紙に榊の枝を通して結び下げる。これを「はちじょうならし」という。幣取りはさらに一の旦那、二の旦那方へ回つて年頭を挨拶をなし、門飾りに同じく「はちじょう」をならす。次に鍵取りの家を

「ならし」帰つて来て、飯綱八天狗とわが家の分を「ならす」のである。他の家々では以上の家のすんだ後にするのである。この「はちじょうならし」が終わるまでは、若水は汲んで用意してあるが、爐を焚くことも湯を沸かすこともせぬのである。鍵取り、幣取り、一の旦那、二の旦那等の屋敷から爐を炊きつけた煙の上がるのを見て、一般の家では、初

めて爐に火を炊きつけたのである。

正月六日

「はちじょうならし」は、振草村付近でも正月六日に行っている。一に「はちじょう」の歳取りともいい、信州新野でも正月六日であった。五日に門飾りを取り除き、六日に「はちじょう」の歳取りをやったのであるが、すべて元旦と同じことをやるのが作法であるという。そうして屋の棟に行うものを別に「大はちじょう」とも言っている。

かどがみばしら 門神柱

門飾りの中心になる杭のことで、郡内でも豊根村で言っている。高さは五、六尺より一丈ぐらいのもあって、上端に少しばかり葉をつけたものと、下部を削って皮を剥いたもの、あるいは上部だけを削り、下半分皮を残したものもある。多く栃の木であるが、杉等の家もある。これにはなの木、竹、松の枝等を添えて立てたのである。

みずぐい

前と同じものを郡内園村あたりで言っている。この付近では多く樺で、添えて立てる木には、はなの木、竹、榊などもある。

はぐい

または「はんぐい」とも言い、豊根村の一部地方から山を越えて長野県に入っても言っている。そしてこれに用いる木の種類は、別に定まってははいない。すべて実の生る木を宜しとしている。そうして三河の豊根村の上下黒川、古真立等では、これにかならず二つか三つの枝をつけておく。そのことについては、昔はこの枝に猪鹿の類を下げたものと言うが、その点はどうかと思う。

おとこ木

門松の柱を、「みずぐい」「はぐい」等と言った一方、遠江磐田郡の佐久間村、水窪町付近では「おとこぎ」といっていて、竿の如く、はるかに丈の高い物を立てている。

門飾りの形式

門神柱すなわち門柱の数はこれは一定でない。屋敷によって一本、二本、または三本、四、六、八、十六等である。したがって一本が単位かあるいは二本が基本かはわからぬが、四本、五本、八本、十六本等の数はこれは一家中の潰れ屋敷の分をかわって建てるとも言っている。したがって屋敷が古く、一家の中に潰れ屋敷等の多くあるものは、その分余計になった訳である。

やす

藁で作った一種の祭具で、前言った古戸田楽等のかぶり物と同型である。これを門柱に結び下げ、または歳神棚、竈の神等にも供える。一個独立したもの、二個連結したもの、また五つを花の形に連結せるものもある。いずれも一個の大きさは口の直径一寸五分ないし二寸のものであるが、中には直径一尺ほどのものもある。



わかき

「にゅうぎ」ともまた「おにぎ」とも言う。門柱の根元にならべ積みあるいは寄せて立てる。これには丸太のものと割木のものとがあるが、丸太のものにも斧目が印だけでも入れてある。この飾り方は、この地方で、正月薪を取って家の軒に積み飾る「かなぎ」と同じ形式のものもある。正月一日または一三日朝に、これ一本おきに、その年の月の数を書く、すなわち一二月または一三月、ときには線をその数だけ引くもある。また三河の段嶺村〔現、設楽町〕、作手地方では、墨のかわりに鉋目を横に入れたのもあったと言う。また新野では、墨をつけぬ前を「わかき」と言い、文字を記すと「おに」または「おにぎ」と言っている。

はざ

門飾りを別に「はざ」と言う。一三日の「もちい」の歳取りの晩を「はざしよい」と言っ
て、「わかき」に饅頭を櫛の如く掛けて祭る。「はざ」の名は一般に「わかき」の意にも、
また門柱にも両様を取れるが、全体を言う意が強かった。

みたま祭り

みたま（御霊）祭りは、歳取りの晩に行なう。塩なしの小豆飯を焚き、これで小さな握り飯をたくさん作り膳に盛って仏壇に供え、後で下げて食べる。これは一方歳神棚、門松、竈等にも供える。多く三河の豊根村山内での風であるが、振草村古戸あたりでは、膳に飯を山型に盛って祀る。これを七日まで置き、後は乾飯にする。そしてこの間は仏壇はいっさい拝まぬ。同じ振草村でも、平山字新畑等では、大きな握飯を月の数ほど作り、これに箸を一本ずつ挿して祀る。要するに儀式の形式は細かに言えば家々で異なっているか、あるいは家系により分かれていたのである。そうしてこれには歳神と、一方渡りの神はじめあらゆる神々が対照となっていたのである。